

関東大震災のその日

後藤新平は麻布桜田町の自邸で新内閣の形勢について番記者たちと談じていた。大震災直前に首相加藤友三郎が急死、組閣の大命が山本権兵衛に降ったものの、難航。その最中の9月1日正午の直前、後藤邸の壁土が落ち柱がギシギシと鈍い音を立て屋根瓦が庭に落ちつづけた。記者は飛び出し、後藤は公用車の運転手を促して首相官邸へと急いだものの、道路は倒れた電柱や看板に遮られ容易に進まない。あちこちで火の手が上がっている。

帝都復興、後藤はどう行動したか

平』の中で根本策は次の4つであったと断言している。

- 一、遷都すべからず。二、復興費に三十億円を要すべし。三、欧米最新の都市計画を採用して、我が国に相応した新都を造営せざるべからず。四、新都市計画実施の為には、地主に断固たる態度を取らざるべからず。

国家緊急事態に対しての後藤の瞬発的な反応力がここに表れている。この根本策の論点は、遷都ではなく東京に「新都を造営」し、そのためには「地主に断固たる態度」を取って焼土を国がすべて買い取る、いわゆる「焼土全部買上案」を前提としていたことにある。後藤の閣議での主張はこうである。

正論



拓殖大学顧問 渡辺 利夫

い下げれば、経済上から見て国家の損失は決して多大ではなく、その方法が時機よろしきを得ればかえって最小の経費をもって最大の効果をあげることができると

政治家の使命は

この案に対しては、地主や政治家の既得権益者の抵抗が頑強であった。予算も根本策30億円は紆余曲折を経て実に4億6800万円にまで減額された。解散総選挙に打って出、改めて増額を狙おうという声も賛成派にはあったが、明

日をも知れぬ被災民の窮状の解消が最優先だ。与えられた条件の中で最善の成果を得るといのが政治家の使命だと後藤はみずからいい聞かせた。

台湾民政長官の時代、はるかに

厳しい予算制約の中で土地調査事業、南北縦貫鉄道敷設、基隆築港の「三大事業」を成し遂げたことを思い起こしていた。が、非情な運命が後藤を待っていた。摂政官が暴徒によって発砲を受けるとい「虎ノ門事件」が起き、山本内閣は責を負って総辞職。後藤も無

念の退陣を迫られた。在任期間はずか120日であった。

後藤は東京市長を、かねて厚い信頼を寄せていた永田秀次郎に託した。永田は第3代の拓殖大学学長後藤の後を継いで第4代学長をも務め、後藤終生の側近であった。永田の事業の中心は帝都復興のための区画整理である。市民の協力を求める永田の演説が残されている。

「道路橋梁を拡築し、防火地帯を作り、街路区画を整理させなければならぬ。若し万一にも我々が今日目前の些細な面倒を厭って、街並や道路をこの儘に打棄て置くならば、我々十万人の同胞は犬死にした事となります」

現存する構造物に思う

墨田区の横網町公園には、永田の句碑が建てられている。

焼けて

直ぐ

芽ぐむちからや

棕櫚の露

「大震災の混乱悲愴をきわめる焦土のさ中において再建に奮いたつ市民の意気に感激し、復

興」と題してよんだ句である」と碑には刻印されている。碑の場所は墨田区本所横網町にあった陸軍省被服廠跡であり、移転にともなうて東京市に払い下げられた広大な土地である。被災民のうち約3万8600人がここで絶命、東京市全体の死者数の55%に相当したという(吉村昭「関東大震災」)。

区画整理は震災による焼失地域の9割に及んだ。隅田川にかかる永代橋、清洲橋、蔵前橋、駒形橋、言問橋、神田川にかかる聖橋、万世橋、柳橋、また隅田公園、錦糸公園、浜町公園、昭和通り、靖国通り、永代通り、晴海通りといえは、東京に住まう人間であればその名前に聞き覚えのない者はおるまい。これらは遺構ではなくすべて現存する構造物である。

言問橋といえは平安の歌の世界、柳橋といえは江戸の花街をイメージさせてくれる。建設にいたるまでの緊迫感とは異なる、むしろやすらぎさえ覚えさせる郷愁の名称となっているのも興味に尽きない。

(わたなべ としお)